

タテとヨコから見た河西回廊～2006年9月黒河全流域巡検の概要～

佐藤 貴保（大阪大学非常勤講師）

2006年9月、オアシスプロジェクト研究メンバーの多くが黒河流域を訪れた。訪問の主たる目的は、①プロジェクト最終年度にあたり、各人がやり残した作業を完了すべく、研究の対象地域である黒河流域を調査すること、②内蒙古自治区額濟納旗で開催される「カラホトの歴史と環境に関する国際シンポジウム」（以下、シンポジウムと略す）に参加し、これまでの研究成果を発表すること、にあった。筆者は荒川慎太郎・井黒忍・井上充幸・児玉香菜子・藤田耕史・三宅隆之（五十音順）の各氏と共に黒河流域全域を巡検した。

以下、筆者の行動記録をもとに、巡検で訪れた場所と時刻を列挙する（時刻は現地時間）。訪問地の詳細な情報は、各隊員の報告を参照されたい。

9月10日（蘭州空港—市街地間で激しい雷雨。巡検中、降雨があったのはこの時だけ）

関西・中部・成田空港（空路）→北京空港（空路）→蘭州空港。ここからランドクルーザーに分乗し移動。甘肅省蘭州市泊。

9月11日（蘭州の7:00の天気は快晴。気温12.6度）

11:00 蘭州発→15:00 武威で昼食→18:45 張掖着。

9月12日（張掖の7:00の天気は曇り。気温13.5度）

9:00 張掖市中心部の大仏寺（宏仁寺）及び境内にある張掖市甘州区博物館を見学。大仏寺は西夏時代の創建と伝えられている。本堂には中国最大の涅槃仏（身長34.5m）を安置。博物館には西夏時代の貴重な碑文のほか、明清時代の文物が多数展示されている。このあと、高台县へ移動し、合黎山脈沿いの黒河中流域に向かう。



写真1 張掖大仏寺



写真2 高速高台IC付近からの風景

13:59～14:07 高台县羅城郷紅山村の紅山魁星楼（N39°40'30.9 E99°35'44.4）を視察。

清朝時代末期に建てられた楼閣で、楼上には音の良く響く太鼓が置いてある。

14：24～55 羅城郷天城村の鎮夷城城壁（N39°47'36.1 E99°28'33.7）を視察。鎮夷城は明代に創建された城郭で、城壁が一部のみ残っている。城内は、現在は集落になっている。気温は28度。

15：27～52 羅城郷天城村閻家峽にある清代の墓を調査。



写真3 閻家峽より黒河西岸を望む



写真4 正義峽水文站で聞き取り調査

16：00～40 正義峽水文站（N39°49'27.0 E99°27'21.1, 標高1275m）を訪問し、聞き取り調査。流量計などの観測機器が設置されている。黒河の水位は約60cm。

19：20 張掖に戻る。

9月13日

9：10 張掖のホテルを出発。黒河上流域へ。

10：20～47 張掖市鷺落峽の水電公司付近の丘（N38°48.613' E100°09.940'）から扇状地を展望。麓付近に休耕地が多い。

10：52～11：17 鷺落峽のダムと地下式灌漑水路に関連すると見られる崖の横穴を視察。横穴は屈んで入れる。



写真5 鷺落峽のダム



写真6 臨沢県板橋鎮付近を流れる黒河

14：12～52 臨沢県板橋鎮の禅寺（香古寺）で石碑を調査。堂内に明代の石碑と張掖市甘州区博物館所蔵の西夏時代の碑文を複製した石碑があった。

16：25～58 臨沢県新華鎮王寨村の運転手の親戚宅を訪問。村は一面とうもろこし畑。



写真7 臨沢県新華鎮王寨村のとうもろこし畑



写真8 裕固族の民族村の主人

17：32～21：40 高台県の裕固族の民族村で夕食。モンゴル・チベット式の宴会。

24：11 酒泉着。



写真9 看板（張掖市明永郷永和村）



写真10 節水を呼びかける看板（酒泉市金塔県）

9月14日

10：16 酒泉発，嘉峪関へ。途中，北大河を渡るが，水は流れておらず。

11：02～12：40 世界遺産嘉峪関城を視察。明代に築造された万里の長城最西の城郭。長城の壁はもう少し西まで延びている。城内の明清時代の石碑を調査。かつて市街地にあった長城博物館は城内に移されている。



写真11 嘉峪関城



写真12 嘉峪関城から西にのびる万里の長城

16：00～45 酒泉市博物館視察。『地球の歩き方』に載っている博物館の場所から移転している。石器や漢代の竹簡などが展示されている。

9月15日（酒泉の6:00の気温は5度）

中流域で調査をしていた相馬秀広・森谷一樹・山崎祐介・渡辺三津子の各氏と合流し、祁連山脈中の七一氷河（甘肅省肅南裕固族自治県）へ向かう。

6:00 酒泉（標高1489m）を出発。9:47 七一氷河管理事務所（標高3900m）着。

10:25 ごろから登山開始。11:55~12:30 までに全員が標高4360mの氷河末端付近の目標に到達。天気は快晴。気温4.3度。このあと氷河末端の状況や観測機器を視察。

15:50 七一氷河管理事務所に下山・休息（~16:25）。19:00 酒泉着。



写真13 七一氷河登山風景①



写真14 七一氷河登山風景②

9月16日

6:17 酒泉発。金塔県を經由して額済納へ向かう。

7:07~12 金塔県北部の綿花畑を視察。ちょうど綿摘みの真っ只中。この後航天鎮天倉郷を通過（8:04）すると、額済納までゴビが続く。テント張りの「蒙古飯店」で早い昼食（9:35~10:15）。その先、国道を離れ道なき砂漠を横断。

14:55 シンポジウム会場兼宿泊場の額済納賓館に到着。



写真15 綿花畑に日が昇る（甘肅省金塔県）



写真16 ゴビの中をのびる鉄路（額済納旗南部）

9月18日（シンポジウム2日目。参加者全員でエクスカージョンを行なう）

8:11 額済納賓館から大型バスに乗り、南へ。

9:03~9:13 紅城子遺跡を視察。漢代の城郭で、四角い城壁はよく残っている。

9:28~9:52 大同城遺跡を視察。北周時代の創建と説明書きにはある。唐代には同城守捉と呼ばれる軍事拠点だった。内壁・外壁の二重構造で外壁は崩れている箇所あり。

10:00~11:40 黒水城（カラホト）遺跡を視察。西夏時代の内城とモンゴル帝国（元朝）時代の外城の二重構造。この遺跡のシンボルである北西角の仏塔はモンゴル帝国時代のもの。近年だいぶ補修された。南西角にはモスクがある。城内は陶片が無数に散乱、寺院跡の遺構を確認できる。3つの城郭遺跡を比べて見ると、紅城子、大同城外城、黒水城外城の順に、城郭がそれぞれ数倍大きくなっていることがよくわかる。



写真 17 紅城子



写真 18 黒水城の外城内から北西方向を望む

12:02~23 怪樹林と呼ばれる胡楊の立ち枯れを見学。説明書きによると、黒水城の守将の伝説と関連があるらしい。天気は快晴。気温 27 度。一旦、額済納賓館に戻る。

14:42 今度はランドクルーザーやタクシーに分乗し、ソゴノールと天鷲湖を目指す。

15:36~55 ソゴノール（現地の看板は「居延中海」）視察。



写真 19 ソゴノール



写真 20 旧居延沢最高点から。天鷲湖はどこ？

17:44 天鷲湖（かつての居延沢）視察。

18:14~29 旧居延沢湖岸線の最高点付近（標高差約 33m）で天鷲湖を俯瞰。

18:47~19:07 砂漠を散策。19:32 額済納賓館着。

9月20日（額済納の8:00の天気は快晴。気温24度）

8:11 エクスカーションで使った大型バスで寧夏回族自治区銀川市へ。18:59 銀川着。

9月21日

銀川空港（空路）→北京空港（空路）→関西・中部・成田空港

筆者の研究分野は歴史学であり、もっぱら歴史資料を読みながら研究を進めている。ただ、研究対象としている地域・時代の景観がどのようなものであったのか、人々がどんな暮らしをしていたのかまでは歴史資料にあまり書かれない。地図や衛星写真のデータは近年詳細になってきたが、どうしても平面的にしかとらえられず、立体的なイメージがつかみにくい。この問題を解決するには、現在の景観を実地に見るのが最も効果的であることを今回の巡検で知ることができた。

一般に河西回廊と呼ばれる甘粛省西部を、筆者はこれまで南に祁連山脈がそびえ、その北麓を東西に廊下のごとく平地が伸びているように考えてきたが、実際に河西回廊を東西（ヨコ）だけでなく、黒河流域を南北（タテ）に巡検してみると、考え方が変わってくる。武威と張掖の間には幾筋もの丘陵・山地が走り、北側にも山脈が控えている。そして張掖を貫流した黒河が細い峡谷を北へと流れていき、標高が再び高くなる額済納で湖を形成する一黒河流域が一つの盆地のような地形をし、北のほうに開けているというイメージをつかむことができる。筆者が研究対象としている西夏王国は、11世紀に黒河流域を含む河西回廊全域を征服する。そのときの進軍ルートは、本拠地の銀川から武威・張掖へと東から攻めるのではなく、まず銀川から北の額済納に向かい、その後黒河沿いに南下して張掖へ攻め込んだと考えられている。筆者はこれまで、この進軍ルートは西夏の「奇策」だった、あるいは歴史資料の間違いではないかと考えていたが、必ずしもそうとは言えなくなってきた。むしろこのルートこそ、地形をうまく利用した「正攻法」だったのかもしれない。

このたびの巡検には文系・理系様々な専門分野の研究者が参加した。それぞれの研究の一端はこの後の報告とコラムで垣間見られよう。筆者は植物や地質のことには疎いのだが、様々な分野の研究者に同行することで多くを学んだ。例えば砂漠の中に生えている植物が何なのかは筆者にはわからないのだが、この植物は薬草である、この植物はある気候・地質のところにはしか生息しない、最近現地の人々が大量に摘み取って売っているらしい、などと同行者から指摘されると実に有意義である。そういえば西夏の主力輸出品の一つが薬草であった、砂漠地帯を治める西夏ならではの特産品だったことを気づかされるのである。まことに自己の研究にも刺激を与えてくれる巡検となった。このような経験は、歴史学者だけで編成された巡検隊であれば、決して味わえなかったであろう。

この巡検を実施するにあたり、各隊員はそれぞれランドクルーザーや宿泊施設の手配、通訳、ビデオ撮影などで様々な準備、対応を的確に務めた。中国語の会話能力も体力もろくに無い筆者は、ただ他の隊員のお世話になるばかりであった。拙稿を借りて、巡検の成功に尽力された隊員の皆さん、現地の皆さんに心から感謝の意を表したい。